有田誠（ありたまこと） 京丹波町在住の映画愛好家。

写真は、香港九龍城。1981年筆者撮影。

一九八一年 香港

四十年以上前になるが、初めて香港に行った。友だちの知人に頼んで、その夫の医師が所有するアパートに泊まれることになった。

高層の老朽化した棟が建ち並び、両側から道路に向けて洗濯物がひしめいている。乱雑で騒々しい香港的風景。

おかしかったのは、そのアパートが武術道場で、夕方からはその練習に使われるのだ。早朝から午後にかけては、深夜営業のタクシー運転手が寝る。夜遅くから朝までの「空き時間」を私に使わせてくれたのである。

武具が壁を占拠している。その点検に二人組の警官がやって来た。イギリス人と中国人が組んでいた。香港はイギリスが支配していると、改めて思わされた。

中国への返還まで二十年を切っていた。その医師は、医業そっちのけで、広東（カントン）へ野菜の買い付けに行った。香港を見限り、カナダ移住の資金稼ぎに忙しかったのである。

そんな中でも、突然夜現れて「メシ食いに行こう」ともてなしてくれた。ある時は、まったく知らない人のアパートに連れて行かれた。言葉が通じないままに、あり合わせのおかずでごはんを一緒に食べた。この混乱するような滞在が、何とも心地よかった。

旅行の「成功」の目安は、土地の人にごちそうになることである。

鈴木則文監督との一日

『トラック野郎』シリーズ十作の鈴木監督が、真田広之主演『吼えろ鉄拳』（一九八一）のロケハンで香港に来た。同コンビによる前作『忍者武芸帖 百地三太夫』（一九八〇）のとき、撮影の中島徹カメラマン宅で食事を一緒にしていたので、ロケハンに同行させてもらった。

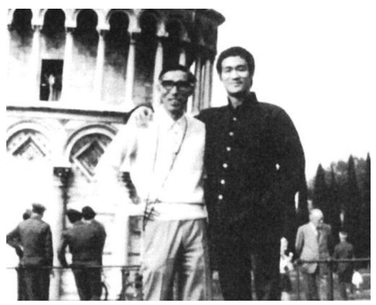
返還前の香港は、猥雑な活気に溢れ、何でもありの東映と相性がよかった。

「おれは資本主義だろうと共産主義だろうと頼まれれば（その裏をかいて）何でも撮るもんね」と、香港で言う鈴木監督は、実にかっこよかった。

一行は、北坂カメラマン、藤原助監督、本田プロデューサーの四人、そこに現地在住の年輩の日本人男性が案内役として現れた。

街中のロケ現場などを手際よく確認したのち、彼はゴールデン・ハーヴェスト（嘉禾電影有限公司）撮影所に我々を招待してくれた。所内の人たちの彼に対する態度は、礼儀正しく、尊敬がこもっていた。何か大物という感じがする。

西本正。香港映画の技術を三十年に渡って支えたカメラマンである。


香港でロケハン中の鈴木則文監督（左から二人目） 1981年筆者撮影

大連に育ち、満映から敗戦後、新東宝で中川信夫監督と『東海道四谷怪談』（一九五九）など八作でコンビを組む。香港で『楊貴妃』（一九六〇）を撮り、カンヌ国際映画祭でフランス高等映画技術委員会色彩撮影賞を受賞。ブルース・リーに請われて『ドラゴンへの道』（一九七二）、『死亡遊戯』（一九七三）を撮影した。

西本正と李香蘭（山口淑子）1957年

香港までの西本正

一九二八年、福岡に生れ、六つで両親を失くす。姉の嫁ぎ先の満州大連に渡る。姉の夫は満鉄社員で、二人の養子となった。

満鉄系の満州科学工業に就職したが、新聞広告で「満洲映画協会撮影技師見習募集」を知って、応募する。四十倍近い試験に合格、日米開戦の年に入社した。養成所の主事で、戦後東映の動画部に入ったのが赤川孝一。赤川次郎の父である。

翌一九四二年、大日本映画協会の教育機関、日本映画学校に派遣される。内田吐夢の『飢餓海峡』（一九六五）、『人生劇場 飛車角と吉良常』（一九六八）の仲沢半次郎カメラマンとは同期。野村芳太郎と松本清張作品でコンビを組んだ川又昂は二年後輩だった。

満映から中国人として唯一派遣されたのが、馬守清。彼は満映解散後の責任者となった。その後、北京で毛沢東や周恩来など大物のニュース撮影は、すべて彼が担当したらしい。岸富美子・石井妙子の『満映とわたし』（文春二〇一五）に馬守清のこともふれられている。張藝謀（チャンイーモウ）は彼の弟子にあたる。

東京留学中の西本正の最初の下宿先は、芝の連れ込み宿だった。閉口して右翼の担当課長に相談すると、筑前玄洋社の頭山満の高弟がやっていた高田馬場の松左塾に入れられた。朝六時起床で座禅、夕方は褌をつけて相撲が日課だったらしい。

満映復帰後は撮影助手として敗戦を迎える。満映の関係者の多くが、新京（長春）より北、ジャムス近くの鶴崗炭鉱に送られた。団長の内田吐夢が帰国したのは、一九五四年だった。抑留中に東京の妻が読んだ和歌 ―

遠つ国の君は帰らず
いく年のわびしき春を
子と送りしか

西本正は、馬守清に新京残留とされ、ソ連兵の略奪に対する夜警グループをつくった。武川寛海という人が一緒で、ゴダイゴのタケカワ・ユキヒデの父親。戦後、東映京都の企画部長をやった辻野力弥とは、食っていくために商売をしたとのこと。戦後できた東映は、満映出身者の受け皿になっていた。七十年代まで太秦には満州帰りがいっぱいいたのである。（この項続く）

西本正とブルース・リー（イタリア1973年）

〈前号補遺〉

関東軍七三一部隊にふれた松本清張作品が三作ある。『屈折回路』（一九六五）、『小説帝銀事件』（一九五九）、『日本の黒い霧 帝銀事件の謎』（一九六〇）である。七三一部隊関連では今年も一冊、中脇初枝の小説『伝言』（講談社 二〇二三）が出版された。